感性を育む言語活動としての連句　～その指導方法と教材の開発～

The RENKU for Japanese language education that cultivates students'feeling for language

国語科　宗　我　部　義　則

Yoshinori SOGABE

要　　旨

平成29年『中学校学習指導要領（国語）』では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するという目標の達成に向けて、具体的な指導の在り方や教材・言語活動の開発が求められている。本稿では「感性を育む」「感性的思考の力を高める」言語活動の視点で「連句の創作」を指導を展開した。生徒作品例とその分析を通して、その有効性が示唆された。

キーワード　：　連句、指導法開発、教材開発、感性、言語感覚、感性的思考

１　連句創作の指導法開発の意義とこれまでの指導法研究の経緯

連句は、五七五の長句と七七の短句を交互に連ねて創作していく中で、四季折々の情景や人情の機微を描き、日常生活に詩を見出していく協同制作の文芸である。その実作は、学習者の言語感覚を育み、我が国の言語文化に参加するにふさわしい言語活動たり得ると考える。しかし、短詩型文学の指導としては、近現代の短歌（主に２年生）、俳句（主に３年生）、和歌（主に３年生）が行われ、短歌や俳句については創作指導も広く行われてきたものの、連句については試行的な実践や実作者による啓蒙的授業にとどまるのが実態である。教科書でも「おくのほそ道」（3年）の冒頭部分の「表八句を庵の柱にかけ置く」の解説として俳諧（＝連句）に触れる記載があるが、創作用の教材としては、例えば『新しい国語』（東京書籍・H14版）などが「書くこと」領域の小教材として取り上げたのがごく珍しい事例と言える状況である。

稿者は1992年に初めて連句創作の授業を試行して以来、「国語科教材としての連句」という視点から指導法開発を行い、連句の国語科教材としての魅力を明らかにしてきた。主な研究成果についてごく概略を列挙すれば次の通りである。（詳細は、それぞれの脚注に示した小論を参照いただきたい。）

第１次（試行的段階）[*1]

①実験的試行（1992.2　対象：３年）

入試の中心日に受験のない女子生徒を集めて句会を実施（学年学習）。連句の基本は押さえつつ短時間で楽しめるように「表四句・裏八句、一花一月」による独自形式を考案し、これを「暦十二韻」と名付けた。

②授業化の試行（1992.3　対象：２年）

３年生での試行をふまえ、２年生の国語の授業で実施。導入に作品例１を示してやり方をつかませ、歳時記に所収の俳句を発句として「脇起こし」の形で付句の方法を学習。その後グループで句会を進める「導入→脇起こし句会→披講→自解」という展開を開発。以後の連句創作の授業の基本展開となった。

作品例１

発句	語らえば友ある窓や風光る	雅辺
脇句	皆の瞳の輝き忘れじ	山吹
第３	桜餅食(は)めば心に花満ちて	桜女【花】
4	三日坊主のカロリー計算	とほる
5	ハイレグの水着まとひて湘南へ	華奴
6	夕日の海に二人よりそふ	駒智
7	夏の恋もみぢとともに舞ひ落ちる	と(恋)
8	心に響く虫の音さびし	山
9	秋祭ほほゑみ照らすお月様	桜【月】
10	カラオケがなるおじさんの群れ	華
11	一すじの足跡つづく雪明かり	駒
挙句	カレンダー買ふ街のにぎわひ	華

第２次（実践指導法の開発）

③対話への着目（1994.3：１年）[*2]

創作過程の対話に着目し、対話指導の観点から授業を構想。対話支援のため「発想のヒント・題材リスト」を考案。これらは修正を加えつつ現在も活用している。（→p.10）

④視点論の導入（1994.12：２年）[*3]

前年度③を体験した生徒を対象に、「転じと変化」の指導のため、「人情自他」（付句における視点論）の導入を試行。生徒たちは人情を意識できたが、使いこなす生徒もいれば、理解・活用できない生徒もいた。初めて連句を体験する段階でここまで指導するのは厳しく、また以後は授業時間数減の影響もあって２年間にわたる連句創作が困難になったこともあって、人情の指導は行っていない。

⑤歌仙形式の試行とLANの活用（1995：３年）[*4]

選択教科国語の課題として③④で２年間経験した生徒８名（男子２、女子６）を対象に歌仙形式を試みた。暉岡・宇咲『連句のすすめ』[*5]を輪読後、３組に分かれて歌仙を実作した。教室LANによるCSCL(Computer Supported Cooperative Workの略）の教育への導入を試行しつつ、オンライン・オフライン併用の句会として実施。**作品例２**は、男子２名と教師との三吟で完成させた歌仙作品である（他は３人＋教師の四吟）。中学生による連句創作の一つの到達点的な完成度を示し得た。

⑥付句の指導法の再開発（1996～1997：１年）[*6]

ブレーンストーミングを導入し、発想・連想の幅を広げようとした。このとき開発した付句指導ワークシートは、さらに若干の修正を加えつつ現在も活用している。

⑦「転じと変化」の指導法の再考(2012：2年)

「転じと変化」について、人情論ではなく、「打越との離れ」を重視した指導を開発。本校研究協議会の公開授業として実施。脇句で付句を学び、第三の練習で「転じと変化」を学ばせる展開は、本稿で取り上げた2018年度の指導事例をとおして参照することができる。

作品例２　歌仙「万緑の巻」

初折

発句	万緑の中や吾子の歯生え初むる	草田男
脇句	希望をのせて涼しげな風	麻理子
第３	ﾄﾙﾈｰﾄﾞ、ｵｰﾙｽﾀｰでぶちかまし	生
4	景気回復ねらうＣＭ	俊郎
5	名月も終点まぎわのマイホーム	信弘【月】
6	勉強部屋に点る秋の灯	雅辺
7	女子大の銀杏並木を踏み歩き	俊
8	ボディコン娘純なふりして	信
9	うっかりとﾃﾞｰﾄのﾀﾞﾌﾞﾙﾌﾞｯｷﾝｸﾞ	雅(恋)
10	後で後悔あのときのこと	俊
11	ﾃｽﾄ前「明日やるから」でもう前日	信
12	闇汁の鍋ぐつぐつとする	雅
13	凍てついた窓の外には冬の月	俊【月】
14	出たぞ！オウムに解散命令	信
15	すぐにまた待ったのかかるヘボ将棋	雅
16	七冠めざし散る羽生の夢	俊
17	敬礼しお国のために花になる	信【花】
18	原爆展の午後は長閑に	雅

名残の折

19	春の畦歩けば肥が飛びかかり	俊
20	カラスが鳴いたらみんなで帰ろ	信
21	今日もまたｶﾂｱｹﾞ・ｼｶﾄ・ﾊﾟｼﾘ役	雅
22	震える指で書く僕の遺書	俊
23	あるもんだプレイボーイの大失恋	信（恋）
24	君のタオルに残るうつり香	雅
25	夏の夜コートで隠す全裸体	俊
26	昼間のパパは国語の教師	信
27	世界地図ｲﾝﾀｰﾈｯﾄで小(ち)さくなり	雅
28	秋葉原での深夜の戦い	俊
29	信長の見上げた月も同じ月	信【月】
30	ヌーボー注ぐギヤマンの盃(はい)	雅
31	秋の田は黄金の稲穂敷き詰めて	俊
32	村の一座は明日初日とか	雅
33	喝采をあびてお猿が宙返り	信
34	未来を拓く宇宙飛行士	俊
35	夜籌に花ゆらめいておぼつかな	雅【花】
挙句	子猫の眠る膝のぬくもり	信

２　本稿における指導法開発の視点――「感性的思考」への着目――

2017年(平成29年)に告示された『中学校学習指導要領』では、国語科の目標は次のように示された。

> 言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。
> (1) 社会生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
> (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。
> (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに，言語感覚を豊かにし，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

冒頭に掲げられた「見方・考え方を働かせ」という文言は全教科共通に置かれ、『中学校学習指導要領解説・国語編』(以下、『解説』)[*7]では、次のように解説されている。(下線は稿者)

> 言葉による見方･考え方を働かせるとは，生徒が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため，「言葉による見方・考え方」を働かせることが，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。

「対象と言葉（の関係)」「言葉と言葉の関係」を「捉えたり、問い直したり」していく力の育成を考えるとき、近年の議論の中では、これら（対象と言葉、言葉と言葉の関係）の論理的なつながりを捉えたり、批判的に問い直したりしていくことに力点が置かれてきたと言えよう。それは言葉で「思考・判断・表現」していける言語能力・言語運用能力を育てていくための強調点である。一方、私たちが実際に思考し、判断していく上では、実は対象や言葉に対する直観的なとらえや、美醜・好悪の感覚など、いわゆる「言語感覚」や「感性」によるとらえや判断が同時に働いているのは言を俟たない。目標の(3)は、「学びに向かう力・人間性」に関する目標であるが、ここでいう「言葉の価値の認識」「言語感覚を豊かに」という部分には特に関連が深いと考えられる。

「言語感覚」については、『解説』に次の解説・指摘がある。

> 言語感覚とは，言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で，相手，目的や意図場面や状況などに応じて，どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直観的に判断したり，話や文章を理解する場合に，そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができることである。(ｐ．13)

こうした言葉に対する感性に関わる問題について、「感性的思考力」という考え方を提起したのは、益地憲一（2002）[*8]である。益地は、これについて整理し直した「感性的思考力再考」(2007)[*9]という論考の中で、一般に用いられる「論理的思考」あるいは「論理的思考力」との対比を通して、次のように「感性的思考力」を説明している。(以下は稿者による要約)

・論理的思考力：ア　文章表現・理解を筋道立てて行い、言語生活における実践的課題を知的に解釈す

るための能力である。

イ　理性的認識を代表するものであり、その内実についても、関係認識力、問題解決力、推理力、分析的思考等多岐にわたる。

・感性的思考力：ア　文章表現や理解を個人の精神的内面的な価値観に照らして行う能力であり、個々の言語表現を表現者・理解者の情緒や心情、経験などと結びつけながら、新たな情緒や認識、感性として定位させていく能力（豊かさや温かさを生み出す習熟的能力）である。

イ　感性的認識を代表するものであり、その内実については作品や表現対象を直観的全体的包括的に受けとめる力、想像・発見・問題解決などにつながる高次の内面的精神的能力である。

ここで「感性的認識」については、「「論理的思考」における、「（対象を）見る」という行為によってもたらされる理性による認識である概念的認識に対して、現象や外見でなく「本質を見抜く」ことによって生まれる「価値の認識」である。」と説明している。そして、小林秀雄「美を求める心」（『考えるヒント3』所収）を引用しつつ次のように補足している。（稿者が箇条書きに整理した）

・ある言葉の意味がわかるということは、その言葉を別の言葉に「置き代えてみれば合点がゆくという事」であるが、例えば山部赤人の歌は「他の言葉に直して、歌に置き代えてみる」ことはできない。「そういう意味では、歌は、まさにわからぬものな（ママ）です。歌は意味のわかる言葉ではない。感じられる言葉の姿、形なのです」と説明をし、「言葉には意味もあるが、姿・形というものもある」とまとめている。（稿者注：「」は小林の引用。）

・言葉の意味をとらえることは「論理的思考力」を駆使して知的に文意を理解し表現することにつながり、言葉の姿形を感じることは「感性的思考力」を通して直観的に文章を鑑賞し表現することに当てはまる。（益地2007）

益地の「感性的思考力」という捉え方は、「能力」としてとらえることで、授業を通して伸ばし、評価できる対象として捉えていこうという考え方と言えよう。従来の「感性」「言語感覚」という捉え方でいくと、その重要性を認め、国語科の指導内容としつつ、感じ方や感覚はどこまでも個人のものであるから、それは経験的な学習を通して、「養い」「豊かに」していくことになりがちである。例えば、『解説』では、次のように書かれている。

言語感覚については，小学校では養うとしているものを，中学校では豊かにするとし，より高いものを求めている。言語に対する知的な認識を深めるだけでなく，言語感覚を豊かにすることは，一人一人の生徒の言語活動を充実させ，自分なりのものの見方や考え方を形成することに役立つ。こうした言語感覚の育成には，多様な場面や状況における学習の積み重ねや，継続的な読書などが必要であり，そのためには，国語科の学習を他教科等の学習や学校の教育活動全体と関連させていくカリキュラム・マネジメント上の工夫も大切である。さらに，生徒を取り巻く言語環境を整備することも，言語感覚の育成に極めて重要である。（下線は稿者）

『解説』ですら、下線部分は経験的な学びを前提にしていると読めるのではないだろうか。益地（2002）は学習評価の問題を論じる中で、この問題を取り上げていこうとした挑戦でもあったのだろう。

学習者たちの言語活動の中で働いている感性的思考は、おそらく、その言語活動の様子を彼らの具体的な言語運用の様子を取り上げ、その分析や考察をしていくことをとおして、捉え、評価していくことになると稿者は考えている。

本稿では、益地の「感性的思考」をふまえ、稿者が長年取り組んできた「連句」の創作指導を通してこの問題の考察を試みたいと考えた。

連句を取り上げたのは、

○連句の句会では、前句の受容（読み）と付句の創作（表現）が同時に進行していくこと。

○小林と益地が指摘するように、定型詩としての連句の言葉は、意味だけでない「姿・形」を持ち、前句の読みにも付句の創作にも「感性」「言語感覚」が働きやすいかもしれないと考えたこと。

○付句創作のイメージ生成の過程を、ワークシート等である程度追跡できること。

などが主な理由である。こうした考え方に基づいて、生徒たちの連句創作の指導の実際と、そこでの付け合い（付句創作）の実際とを考察・評価し、「感性的思考」を引き出す指導のあり方や、それを通して言語感覚を豊かにしていく指導のあり方などを考えていくための一歩としたい。

３　連句創作の実際

初めに、連句の創作指導の実際を示す。

⑴ 連句創作の授業展開の概略

単元名「連句で遊ぼう
～「感じ」と「イメージ」を言葉に～」

対象：お茶の水女子大学附属中学校２年生

次期：2018年7月

※指導展開の概略は右の通りである。

第１次　連句の遊び方（１時間）
第２次　付句の方法（２時間）
　① 付句の方法１：「脇句」を付けよう
　② 付句の方法２：第三以降の付けと転じ
第３次　句会を楽しむ（３時間）
　＊学習のまとめ（宿題。披講は２学期に）

⑵ 導入「連句の遊び方」

卒業生による作品例１（p.1）を示し、連句の特徴や約束ごとについて気づきを発表し合った。学習者たちからは、「奇数句目は五七五、偶数句目は七七で交互」「季語のある句とない句がある」「12句の中に春夏秋冬が全部ある。」「話が続いている。例えば、ダイエットして、新しい水着で海に行って、カレシができて、失恋して……」などの気づきが提示された。こうして次々に指摘しあった後、創作へ誘いつつ、次の各点を確認した。

○五七五（長句）と七七（短句）を交互につないでいく。昔は100句（百韻）、江戸以降は36句（歌仙）が正式だが、今回は12句のお茶中オリジナル形式。

○今回の句会では、約束は次の五つとする。
①五七五と七七の定型を守る。②春夏秋冬を全部入れる。③月花を１句ずつ必ず入れる。
④恋の句を必ず一箇所入れる。⑤一人一句以上付ける（できるだけバランス良く）。

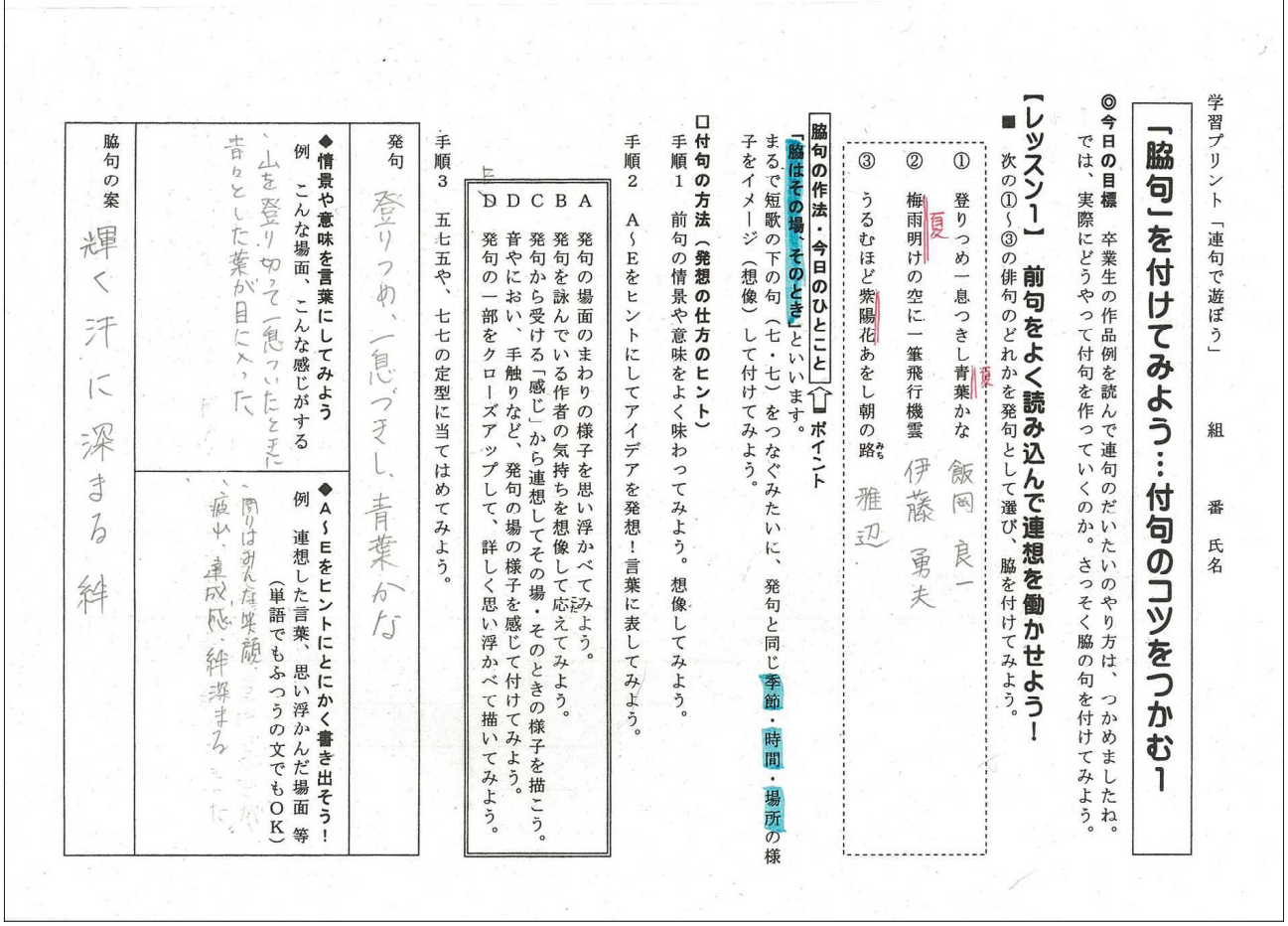
⑶ 付句の方法１：「脇句」を付けよう

初めての句会の場合、前の句をどのように読み解き、そこからイメージをどう膨らませるか、また、そのイメージをどのように付句としてまとめていくのか、具体的に体験させつつ学ばせる必要がある。

本事例では、当季（夏）の現代俳句を発句案として提示し、次ページ**図１**のＷＳ（ワークシート）を用いて「脇句」の創作を指導した。ポイントは次の２点である。

○「脇はその場、そのとき」＝脇句は他の句を付けるときと違って、短歌の下の句（七・七）をつなぐように発句と同じ季節・時間・場所の様子を付けると良いこと。

図１　「脇句」を付けてみよう…付句のコツをつかむ



学習プリント「連句で遊ぼう」　組　番　氏名

「脇句」を付けてみよう…付句のコツをつかむ！

◎今日の目標　卒業生の作品例を読んで連句のだいたいのやり方は、つかめましたね。では、実際にどうやって付句を作っていくのか。さっそく脇の句を付けてみよう。

【レッスン１】　前句をよく読み込んで連想を働かせよう！

■　次の①～③の俳句のどれかを発句として選び、脇を付けてみよう。

①　登りつめ一息つきし青葉かな　飯岡良一
②　梅雨明けの空に一筆飛行機雲　伊藤勇夫
③　うるむほど紫陽花あをし朝の路　雅辺

脇句の作法・今日のひとこと　ポイント
「脇はその場、そのとき」といいます。
まるで短歌の下の句（七・七）をつなぐみたいに、発句と同じ季節・時間・場所の様子をイメージ（想像）して付けてみよう。

口付句の方法（発想の仕方のヒント）
手順１　前句の情景や意味をよく味わってみよう。想像してみよう。
手順２　A～Eをヒントにしてアイデアを発想！言葉に表してみよう。

A　発句の場面のまわりの様子を思い浮かべてみよう。
B　発句を詠んでいる作者の気持ちを想像して応えてみよう。
C　発句から受ける「感じ」から連想してその場・そのときの様子を描こう。
D　音やにおい、手触りなど、発句の場の様子を感じて付けてみよう。
E　発句の一部をクローズアップして、詳しく思い浮かべて描いてみよう。

手順３　五七五や、七七の定型に当てはめてみよう。

発句　登りつめ、一息つきし、青葉かな

◆情景や意味を言葉にしてみよう
例　こんな場面、こんな感じがする
山を登りつめて一息ついたとき、ふと目にとまった

◆A～Eをヒントにとにかく書き出そう！
例　連想した言葉、思い浮かんだ場面　等
（単語でもふつうの文でもOK）
周りはみんな笑顔、達成感、絆深まる

脇句の案　輝く汗に深まる絆

○「付句の発想のヒント」（以下のＡ～Ｅ）を参考にして発想すると良いこと。

Ａ　発句の場面の周りの様子を思い浮かべる。

Ｂ　発句の作者の気持ちを想像して応（こた）える。

Ｃ　発句から受ける「感じ」から連想して、その場・そのときの様子を描く。

Ｄ　音やにおい、手触りなど、発句から受ける感覚を手がかりにする。

Ｅ　発句の一部から詳しく思い浮かべる。

発句を選んだ後、**図１**のＷＳの手順３にしたがって付句創作を行った。各自の脇句案ができたところで、学習班（４人）で発表しあい、１句互選して画用紙に書いて黒板に貼って見せ合った。

まず作者が付句の発想を説明し、次いで選出理由を同じ班の生徒が発表した。以下にあるクラスの脇句の例を、発句案ごとに示す。脇句例の後ろの「ア：……」は生徒たちの発句の解釈。「イ：……」は脇句のアイデアとして、生徒がＷＳに書き込んだ言葉である。どのように前句（発句）を読んで、付句をどう発想したのかが読み取れる。

【各発句に対する生徒たちの脇句の例】

◎は稿者による考察である。

Ａ　登りつめ一息つきし青葉かな　　飯岡良一

例１　登りつめ一息つきし青葉かな
　　薫り感じる青い夏草　　宵瑠

ア：登山。山頂で休んでいる。

イ：一息して見渡すと草の香りが感じられて…。

◎前句は意味または映像的なイメージを浮かべている様子。そこから「ヒントＡ・Ｄ」で周囲の様子を想像し、かつ草いきれ（嗅覚）で付けている。

例２　登りつめ一息つきし青葉かな
　　澄み切る山と薫る涼風　　白涼

ア：山を登り切って一息ついた感じ

イ：青葉の香り。開けた感じ。澄み切っている山。

◎前句は「一息つきし」を感覚的にイメージ。そこから嗅覚、「澄み切って」の感覚を受けて付句を創作している。

Ｂ　梅雨明けの空に一筆飛行機雲　　伊藤勇夫

例３　梅雨明けの空に一筆飛行機雲
　　水溜まりの中空が揺らいだ　　紗那

ア：梅雨明けの暑い日の空にシュッと飛行機雲

イ：梅雨明け→水溜まり。水溜まりに空が映っている。

◎「シュッと」とにイメージ感覚的な受け止めが表れている。付句は鮮明な映像化。空と地の水溜まりの対照する描き方も映像的。

Ｃ　うるむほど紫陽花あをし朝の路　　雅辺

例４　うるむほど紫陽花あをし朝の路
　　夏空見上げ心静まる　　涼賀

ア：滴が一滴ずつ落ちる音。空も青く、心が広くなっている。静かで思わず立ち止まってしまう。

イ：静か→心静まる　梅雨の終わり→青い空

◎「滴が一滴」に繊細な感覚が感じられる。「心が広くなって」は青空から受ける「感じ」なのだろう。「心静まる」は両者のイメージの統合かもしれない。

例５　うるむほど紫陽花あをし朝の路
　　足にまとひし草つゆの玉　　青藍

ア：雨上がりの紫陽花

イ：地面がぬれている→足に草つゆがまといつく

◎前句は意味あるいは映像化で捉えているか。濡れた地面から「まといつく」露へと、連想と肌感覚（触覚）でイメージを生成している。

図2　第三以降の付句と転じ

学習プリント「連句で遊ぼう」　　組　　番　氏名

連句は「変化」がいのち…付句のコツをつかもう2

◎今日の目標　さあ、発句に脇が付いて連句が始まったら、いよいよ連句の句会の始まり。先ず、第三句から後の「付け方のコツ」をつかもう。キーワードは「変化」！

連句の作法・今日のひとこと

「付句は一歩一歩」（by芭蕉）

＊連句は一歩一歩前に進んでいくように新しい展開を作っていくことが大切。けっして後戻りしない（前にもあったなあと思われない）ことが大切だという教え。

今日の連句用語

〔打越〕語らえば友ある窓や風光る　雅辺（発句）

〔前句〕皆の瞳の輝きも春　山吹（脇）

〔付句〕桜餅食めば心に花満ちて　華奴（第三）

【レッスン2】打越・前句の世界から転じる！

◎連句は基本「連想ゲーム＋続き話づくり」

＊発句から挙げ句へ一貫したストーリーでなく、いろんな物語が次々現れるのが上。自分たちさえ予想もしない展開が楽しい。さあ発想を大胆に転換して付けていこう。

【転じと変化を生むコツ】　※作品例から学んでみよう！

○代表的な方法1　前句の読み替え（別の解釈・人物を変える・状況を変える　等）

例　桐の木高く月冴ゆるなり　野坡
　　門閉めて黙って寝たるおもしろさ　芭蕉
　　拾うた金で表替えする　野坡

例　山茶花や雀顔出す花の中　青羅
　　焚き火煙にゆらぐ夕暮れ　亮
　　焼け野原壊れた家を見る家族　聖

○代表的な方法2　打越は無視してでまったく別の話に展開する

例　昼の我ひねもすのたりのたりかな　金
　　母のいやみと微夜の宿題　オダ
　　赤い月気がつけばもう新学期　オダ
　　うわさの先輩彼女できてた　金

例　昼間のパパは国語の教師　信
　　世界地図インターネットで小さくなり　雅
　　秋葉原での深夜の戦い　俊
　　信長の見上げた月も同じ月　信

○代表的な方法3　連想に連想を

例　心に響く虫の音さびし　山吹
　　秋祭ほほえみ照らすお月様　桜女
　　カラオケがなるおじさんの群れ　華奴

⑷ 付句の方法２：第三以降の付けと転じの指導

連句では、発句・脇が二句一章で一つの短歌のように寄り添うのに対して、第三句以降はいかに打越から転じて付けるかも大切になる。そこで、第三句を付けをガイドすることを通して、「転じ方」を指導する。以下、四句目以降はこれを応用して進めることを期待した。ポイントは次の３点である。

ア 用語（打越－前句－付句）　……学習に必要な語句

イ「転じる」ということの理解　……概念的理解

ウ 転じ方のコツ（発想法）　……実践的知識

実際の指導では、前ページの**図２**を示して説明した。

「代表的な方法１」では、「桐の木を月が照らしている」という打越に、芭蕉は「こんな夜は閉門して人を入れず、独り過ごすこそ風流」と隠者の生活を描いた。ところが野坡は、「拾った金でこっそり畳の表替えをした。（だから閉門して人を入れないのだ）」と付けた。前句で風流好みの隠者として登場した人物は、付句によって一転、庶民的な人物に読み変えられた。これを「転じ」と呼ぶ。

野坡の解釈は芭蕉（前句の作者）が句を付けたときの意図とはズレている。それは野坡が芭蕉の意図を無視したり、力不足で句意を読めなかったのではない。前句作者の意図も付句作者の転じも、お互いに理解し了解し合った上で、どう受け止めて、転じていくか、その意外性を楽しむのである。この「転じの妙」が、一座する作者たちを次の付句の創作へと駆り立てるのが連句なのである。

授業では、まずこの事例を簡潔に説明し、その上で、**図２**の中学生作品による転じの好例（代表的な方法１～３）を示して説明した。生徒には「代表的な方法」と示しているが、実はここでは、彼らの付け合いで陥りがちな同じ話が物語のように続いてしまう問題を無くすための発想法を中心に例示している。実際にはもっと多様な転じ方の発想や方法があることを断っておく。

生徒たちの脇から第三への例を示す。（「ア：」は前句の読み、「イ：」は付句の発想。◎は考察）

【生徒たちの第三句の例】

例６　うるむほど紫陽花あをし朝の路
青空映す君の虹彩　　浅葱
ありし日の無垢な心よ今は無し　　凪

ア：瞳に青空（紫陽花）が映ってるよ。虹彩→汚れなし。
イ：虹彩→汚れなし→無垢な心。もう汚れてしまったけど
◎前句は凪という生徒の解釈である。「瞳に青空が映っている」というのは、前句の句意の通りだが、（紫陽花）としているのは、「きっと目の前の紫陽花も映っているだろう」という凪の想像を添えたものであろう。付句の発想は、凪のＷＳの記述によれば、「虹彩」から汚れのない（映像的・感覚的）イメージへ。さらに、「汚れなし」から「無垢な心」へと２段階に連想をつないで句を完成している。執中の法である。「ありし日」は、現実の目の前の様子を描いた発句・脇を過去の思い出のシーンと読み替えた可能性が高い。

例７　登りつめ一息つきし青葉かな
澄み切る山と薫る涼風　　白涼
主人公冒険未だ序章なり　　瑠華

ア：雄大な自然。圧倒されてる。
イ：ゲーム、本の世界、ＲＰＧ
◎前句に雄大さを感じ（映像的・感覚的なイメージ）、「圧倒されている」と心情を想像している。前月経験した林間学校での実感を想起したか。その雄大な風景をゲームや本の物語世界へと転じた。「涼風」が「冒険の始まり」を連想させたとすると、この語のもつ清々しい感じを受け止めてのイメージ化と言えよう。「未だ序章」という捉え方に、涼風がもつ語感を活かした付けが伺え、「句を付ける」という活動がもつ、言語感覚を豊かに言葉を味わう作用が表れていると言える事例ではないか。連句という言語活動は、これを何度も繰り返していくことになるのである。

(5) 四句めからの句会

四句め以降はグループ毎のペースで付け進めていく。句会は衆議で進める。反故紙を切った短冊を配り、これに句案を書いていくが、次の３通りの進め方を助言した。

ア　各自が短冊に句案を書いて提出し一句選ぶ。

イ　付句のアイデアを出し合い、みんなで定型に整える。最初に句案を出した人の句とする。

ウ　付け順を決め、付け順の人の案を中心に定型に整えたり推敲したりする。意見が割れた場合も、付け順の人の意見で決定する。

反古紙の短冊に句案を書いて進める学習者たち

一般の句会では、アのそれぞれが句案を提出して宗匠捌きや衆議で治定していくやり方がほとんどである。しかし、俳句や短歌の創作が苦手な生徒には、俳句や短歌の創作以上に負荷が大きい。

そこでア＋イを中心に進めさせている。一人で句案を作れるときはアで、なかなか句がまとまらないときや、創作に苦手意識が強い学習者は、前句から連想したことや思い浮かんだ句のイメージを語るのを手がかりに同じグループのメンバーで付句として完成していくのである。

ウは、指導経験の中で、グループによってどうしても互いが主張し合って付句の治定ができず、重苦しいムードのまま句会が停まってしまうことが出てきたので考案した方法だ。今年の授業ではこの方法を必要とするグループはなかった。

(6) 清書シートと題材リストによる句会支援

グループ活動として行われる４句目以降の句会では、授業者は机間指導に徹することになる。そこで、それぞれのグループの学習者たちの発想を助け、付け合いを支援するツールとして、次ページの清書用ワークシート（**図３**）と、題材リスト（「連句虎の巻」）プリント（**図４**）を開発してきた。

清書シートの下部に示した「季節配置と月・花・恋の定座」は、発句から挙句まで、授業を実施する季節に合わせて、ベースとなる季節配置、月・花の定座の位置、恋の句の出しどころ、についてガイドしたものである。月花の定座はともかく、予め季節をガイドするのは、先の展開を計画してしまうマイナスもあるが、学習者の付け合いでは、「次は月だから夜の句がいいのかな？」と考えたり、「恋が近づいてきた！」とワクワクしながら盛り上がる姿が見られた。

一般の句会では、通常捌き役、宗匠役が、こうしたガイドを行う。「ここではもう少し雑の句（無季の句）で行きましょう。」「そろそろ恋の出しどころです。」という形である。それは発想を制約するというより、イメージを展開していく助けになるのだ。ただし清書用ワークシートに示した季節展開についてはあくまで参考であり、展開に応じて変えて良いことにしている。

右の「◆季節に応じた配置案」は、句会を行う季節に応じた「暦十二韻」の季節配置（定座の位置を含む）の参考案である。

◆季節に応じた配置案

挙句	十一	十	九	八	七	六	五	四	第三	脇	発句	季節・定座配置の例
秋	秋【月】	雑	雑	夏 or 冬（恋）	雑	雑	冬 or 夏	雑	春【花】	春	春	
春	春【花】	雑	冬	雑（恋）	秋 or 雑	秋	秋【月】	雑 or 秋	雑	夏	夏	
雑	春【花】	雑	雑	冬 or 夏（恋）	雑	雑	夏 or 冬	雑	秋【月】	秋	秋	
春	春【花】	雑	夏	雑（恋）	秋 or 雑	秋	秋【月】	雑 or 秋	雑	冬	冬	

図3　連句清書シート

R-E
7/18

「連句で遊ぼう」―「感じ」と「イメージ」を言葉に―　二年　組　氏名

暦十二韻　風の魂　の巻

メンバー　（白涼　）（瑠華　）
（麒麟　）（可仁鎌　）

作者　季節　定座

盛り上がる・恋の句 ←　　美しく・おだやか

発句	登りつめ一息つきし青葉かな	（良一R一）	夏
脇	澄みきる山と薫る涼風	（白涼）	夏
第三	主人公 冒険未だ 序章なり	（瑠華）	雑
四	今は夕暮れ 待ってる宿題	（可仁鎌）	秋
五	昇る月 明日散る命 舞うウサギ	（麒麟）	秋【月】
六	願ひの糸は 泡沫人へ	（瑠華）	秋
七	泥まみれ サッカー姿に 恋してる	（白涼）	雑（恋）
八	寝てるあなたが 私の白ちばん	（麒麟）	雑（恋）
九	聖夜なる 小さな寝息にプレゼント	（可仁鎌）	冬
十	わずらう病 いつか笑顔に	（白涼）	雑
十一	花便り 硝子の向こう 手を伸ばす	（瑠華）	春【花】
挙句	奇跡を紡ぐ 春風の声	（可仁鎌）	春

お茶中連句式目

①定型（五七五・七七）をできるだけ守る（字余りは可、字足らずは不可）。
②必ず【月】【花】（恋（！））の句を5句目以降必ず入れる。（月・花は定座あり）
③なるべく四季を入れよう。（ワークシートと変えてもよい。）
④同じ題材や言葉は一巻に一つ。生活・社会のいろんな場面（実も虚も）を描こう！
⑤付句を独占しない。連句は「座の文芸」。協力と強調で、楽しく良い作品を。

図4　連句虎の巻（付句の発想のヒント）

学習プリント「連句で遊ぼう」　組　番　氏名

連句の「虎の巻」……連想のタネとして使ってみよう！

◎連句を楽しむためのヒント集です。句会のときに手元において使おう！

【付句のヒント】

A　**その人**：前句の**人物の気持ちや様子**をイメージして連想を広げよう。
B　**その場**：前句の人物や風景の**まわりの様子**を思い浮かべてみよう。何が見える？
C　**その時**：前句の「**ちょうどその時、別の場所では……**」と発想してみよう。
D　**感じ**：**音やにおい・手触りなどの感覚**や、前句の「**感じ（印象）**」から発想。
E　**ズーム**：前句の**一部をクローズアップ**したり、**詳しく思い浮かべて**描いてみよう。
F　**物語**：前句を**小説や漫画・ドラマの一場面と見立てて**続きを付けてみよう。

【題材さがし】　※いろいろな題材をタネにしよう。一度使ったら□にチェック！

■**人物**
□子ども　□お年寄り　□家族（父・母・兄弟・姉妹）　□友だち
□いろいろな職業（政治家　店員　医師　先生　警官・消防士　交通関係……）

■**天気・天候**
□青空　□雨　□雪　□雷　□風　□雲　□嵐・台風　□暖かさ　□暑さ　□寒さ
□三日月・満月・名月・十六夜　おぼろ月（春）・夏の月（夏）・冬の月（月）……

■**風景・地名・名所**
□山　□川　□海　□都会（街・ビル・交差点・踏切…）　□田舎（田んぼ・畑…）
□日本の地名　□外国の地名　□観光地　□ドラマや映画のロケ地

■**動物・鳥・植物・虫**
□動物（犬・猫・ペット）□花（花だけで桜を表す、○○の花）　□樹木（○○の木）
□鳥（小鳥・渡り鳥・カラス・大型の鳥）　□昆虫・虫

■**小説・ドラマ・映画・アニメ**
□名場面　□題名　□登場人物・キャラクター　□舞台・ロケ地　□役者　□主題歌

■**時事・流行**
□ニュース　□できごと　□事件・事故・災害　□スポーツ　□ヒット曲
□政治　□経済　□ファッション　□食べ物・グルメ（和・洋・中）

■**神仏・無常**
□神様　□仏　□神社　□お寺　□お墓　□死　□占い

■**夢・恋・思い出・想像**
□恋　□初恋　□結婚　□別れ　□思い出　□将来の夢　□夜見る夢

もう一つ、グループごとの句会を支援する教材として開発したのが、前ページの**図４**の「連句虎の巻」である。連句で付句を創作する過程を支援するには、

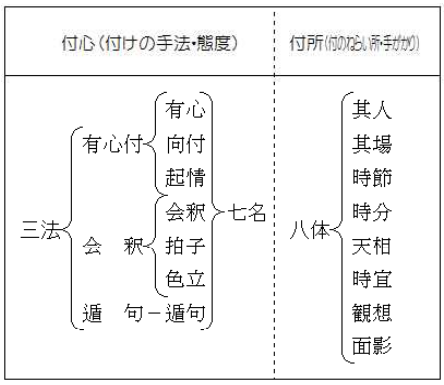
○付句の発想の仕方（前句をどう読み、次の句をどのように発想するか）の支援

○付句の題材（どんな題材を用いて句を作るか）の支援

の両面が必要だと考えた。このプリントのうち、「付句のヒント」の部分は、**図１**の脇句用を汎用化したものである。これが、「発想の仕方の支援」にあたる。そして、「題材さがし」の部分が「題材の支援」にあたる。これを見ながら、グループの中ですでに出た題材にチェックをし、未出の題材をアイデアの種として付句を作っていくようにするのである。共有化することで、グループ内で「子どもがまだ出ていないから、子どもを登場させよう」といった具合に話し合うことも可能になるのだ。

「付句のヒント」の部分は、各務支考の「七名八体」（右図）を参考にして考案した。例えば「其人（そのひと）」とは、前句の人物を見定めて付ける。前句の人物について、前句で言っていないその人物の職業や人柄、日頃の言動など、具体的に想像して付けるのである。「其場」であれば、前句の場面の舞台を想像し、その周辺を想像する、と言った具合である。

◆七名八体（各務支考）



また、「題材ざがし」の部分は、稿者が俳諧実作を学んだ東明雅氏が初心者向けに作成した「題材リスト」を参考にして、中学生が使いやすいように作成したものである。連句の題材としては、古来から、例えば「神祇・釈教・恋・無常……」などといくつかの題材探しのヒントが示されてきた。同時に、これらには、「句去り」と言って、例えば一度「天象（太陽・月・星など）」に関する句が出たら、その巻では何句以上間を開けてからでなければ使ってはいけないといった約束が「式目」として決まっているのである。

いずれも1994年に開発した支援用教材を少しずつ改良してきたものである。特にＡ～Ｆの「付句のヒント」（発想のヒント）については、どのようなヒントの与え方が、中学生にとってももっとも効果的なのか、その時々の学習者の様子に応じて検討し、より汎用性の高いものにしていく必要を感じている。

４　考察――感性的思考を育てる視点からみた連句創作

ここまで連句の創作の指導とその支援について実際について述べてきたが、以下では、ここまでに取り上げた付け句例なども改めて取り上げつつ、「感性的思考」との関わりについて、考えを述べてみたい。現段階では「感性的思考」に対する理解が不十分なため、まだ思いつきの域を出ないものであるが、これによって自分自身の「感性的思考」への理解が進み、「連句の教材化」「連句の指導法開発」に新たなヒントを得られればと考えている。

(1) 青木の「俳句学習の価値」（俳句の教育的意義）の援用と感性的思考

まず、そもそも連句の創作には国語科教材・言語活動としてどのような魅力・意義があるのか。このことについては、すでに第１次の試行段階の拙論の中でも触れたが、連句と同根の「俳句」学習の価値について、青木幹勇が次の十項目を指摘している[*10]。その要点を示す。

①俳句は短くリズムがあり、読みやすさ覚えやすさ、暗誦につながる。

②俳句は短く読みやすいが句意の理解は必ずしも容易でない。この抵抗もメリット。
③俳句は詩。俳句を読むこと、作ることで詩感を養い、詩心を育てることができる。
④俳句表現には言葉の省略、文脈の屈折が多く、理解や表現につなぐことができる。
⑤俳句の表現には、諸種の比喩や飛躍が多く用いられている。
⑥季語の理解と使用を契機に、季節と季節の動き、季節の動きから季感へと関心を広げ得る。
⑦句を理解し趣を感じとるために想像を働かせ連想をあしらって読むことが要求される。
⑧短詩型であり、季語その他の制約があるため語を選び省略をする。それが表現の飛躍や屈折につながるなど、散文では学びにくいレトリックを学ぶことになる。
⑨理解や表現に即し、言語感覚を具体的に養うことができる。
⑩俳句を作ることがきっかけになり、作文に不得意な子どもも書けるようになる。

長い授業実践に基づいた整理で、俳句のみならず、短歌などの短詩型文学についても当てはまるものが多い。連句も「定型の短詩型文学」であり、青木が指摘した価値はそのままあてはまる。

これらのうち、⑨で直接に「言語感覚を養う」と述べていることはもとより、①リズム、④⑤⑧レトリックへの感性、⑦イメージ生成、などの「価値」も言葉への感覚を磨いていくことに関する指摘であると言えよう。例えば、連句の創作場面では、次のようなシーンがよく見られる。

四　虫の音響く夜の細道　零
五　月見れば尾びれ輝く流れ星　麗音
六　水面に映る君の横顔　竹輪（松組Ｂ班）

四と六はどちらも、次の語順だったのを最終的には倒置した付句である。

四　夜の細道／虫の音響く　六　君の横顔／水面に映る

連句の短句では二五・四三を嫌う。下七の語のリズムが二五・四三になると落ち着かない印象になるとしてこれを嫌うのである。生徒たちの付句では、通常の語順（夜の細道に虫の音が響く。君の横顔が水面に映る。）で七七に当てはめていくために、こうした現象が起こりやすくなるのだろう。

しかし、ここで、机間指導をしながら、「入れ替えて、虫の音響く夜の細道、とするのとどっちがいい？」と声をかけると、「変えた方がかっこいい」とハッとした表情を見せてくる。そこで、言葉のリズムって面白いね。なぜだろうね。と尋ねると、「体言止めかなあ」「言い切る感じがかっこいい」などと答えてくる。こうした感覚は、短歌や俳句でもつかめるのだろうか。七七で独立させる連句ではより気づき易いのかもしれない。

(2) 連鎖する創作（連句という創作行為の独自性）

しかし連句が俳句や短歌と決定的に違うのは、「ある一句の創作で完結せず、次の句の創作が連鎖的に行われる」点と、それが「協同制作によって行われる」という点である。

ア　連鎖する創作

連句で付句を付けるということは、次のようなプロセスだと言えよう。

①前句の読み＝創造的な〈読み〉
・前句の句意を解釈する。その際、打越との付き具合も検討する。
・前句の言葉を手がかりに、自らの経験や知識を総動員して、場面や情景、ものごとを具体的に想像する。
②付句の創作＝イメージ生成と言語形象化
・打越との関係に配慮しながら、想像と連想によりイメージを拡充・深化させる。
・生成したイメージを言葉に置き換える。
・長句か短句か中止しつつ、言葉を選択し定型にあてはめて句の形にする。
③付句の提出＝付句案の発表と衆議
・提出された付句の読み＝理解・解釈的な〈読み〉
・付き具合の鑑賞と批評（意味のつながり、句が醸し出すムードやニュアンス・感覚を味わう）
・式目(約束)等に照合して、差し合い（式目への違反）をチェックする。
④付句として治定清記して1)へもどる

これを繰り返していくのが連句の句会なのだ。①～③は行きつ戻りつし、あるいは同時に行われていくのが実際ではないだろうか。この過程の中で、イメージを生成していく際には、前句の意味を考えることとともに、前句の「感じ」を受け止めていく様子や、浮かんだイメージそのものを手がかりに進められていくことが行われているのはすでに事例にあわせて考察したとおりである。すでに取り上げたものも含めて、生徒たちの自句自解を手がかりに改めて見てみると例えば、

例A　登りつめ一息つきし青葉かな
澄み切る山と薫る涼風　　白涼
ア：山を登り切って一息ついた感じ
イ：青葉の香り。開けた感じ。澄み切っている山。

例B　梅雨明けの空に一筆飛行機雲
水溜まりの中空が揺らいだ　紗那
ア：梅雨明けの暑い日の空にシュッと飛行機雲
イ：梅雨明け→水溜まり。水溜まりに空が映っている。

例C　うるむほど紫陽花あをし朝の路
夏空見上げ心静まる　　涼賀
ア：滴が一滴ずつ落ちる音。空も青く、心が広くなっている。静かで思わず立ち止まってしまう。
イ：静か→心静まる　梅雨の終わり→青い空

などの、付け合いによく見て取れる。

Aでは「一息ついた感じ」を身体感覚で感じ取るとともに、「開けた感じ」とイメージを映像的に描いている。Bでは、「シュッと」という部分に、この学習者の中で梅雨明けの空の映像が描き出されているようすが読み取れる。Cでは、前句から音をイメージしているが、それは前句のどこにも出てこない。「朝」

の語感から来るのだろうか。そしてこの学習者は「心の広がり」を感じたという。

こうした前句の読みが、「意味」を読むこと（論理的な認識）と、感覚的に描くこと（感性的な認識）との行き来の中で生まれているとしたら、連句創作という活動は、それを何度も往復しつつ反復する思考活動であると言えるのではないか。

イ　連想と転じ

『去来抄』には「岩鼻やここにもひとり月の客」の句について、作者（去来自身）はもともと「山野を吟歩し侍るに、岩頭また一人の騒客を見つけたる」＝月を愛でる他者を描いたのに対して、芭蕉が「己と名乗り出づらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし」と答えたエピソードが記されている。そして作者の意図を超えた芭蕉の解釈に、「誠に作者そのこころをしらざりけり」と感懐を述べる記述がある。これは発句の解釈をめぐるやり取りだが、連句の座においては、読者が作者の創作意図とは別の解釈で作品を成立させうることが許し許されている。

例えば、今回の生徒たちの作品にも、あちこちにその事例を探していくことができる。一つの例として、蘭組Ｅ班の作品を取り上げてみる。

Ｅ班　「風の魂」の巻

発句　登りつめ一息つきし青葉かな
　脇　　澄み切る山と薫る涼風
第三　主人公冒険未だ序章なり
　四　　今は夕暮れ待ってる宿題
　五　昇る月明日散る命舞うウサギ
　六　　願ひの糸は泡沫（うたかたびと）人へ
　七　泥まみれサッカー姿に恋してる
　八　　寝てるあなたが私のいちばん
　九　聖夜なる小（ち）さな寝息にプレゼント
　十　　わずらう病いつか笑顔に
十一　花便り硝子の向こう手を伸ばす
挙句　　奇跡を紡ぐ春風の声

第三句は、前述のとおり、発句・脇が描く世界を、「雄大な自然、圧倒されている」と感じ取り、そこからの連想で、「ゲーム・本の世界・ＲＰＧ」を発想し、登山の場面から一気に転じている。

五は、ゲームをやっている内に「もう夕暮れ。宿題残ってる」と話をつないだ前句に対して、「遊んでいる子ども」に対して「明日の命を思う特攻隊の青年」をイメージした。夕暮れ→明日散る命→特攻という連想であり、夕暮れで沈む太陽＝日本、昇ってくる月＝アメリカという連想だったと述べていた。

八は、まどろむ恋人を詠んだ句だったが、「あなた」を読み替えて、「大切な我が子」へと転じたのが九である。ここでも彼女たち自身が、面白い展開に大いに盛り上がっていた。

このグループのメンバーのひとりは、次のように「ふり返って」のプリントに書いている。

> 一人一人が前句をどのように考え、どんな付句を考えているのかとてもワクワクした。いろいろな付句があり聞いていてとても面白かったし、なるほどととても納得できた。自分の視野を広げることができた。（「とても楽しかった」の理由）

また、一方で、

> 連句をやってみて、自分で面白い句を考えつかなかったのが、悲しい。考えようとするが、やっぱり思いつかないのは苦しい。（初めて連句を体験した感想）

と書いた学習者もいる。

連想や発想を支援する方法を、様々に工夫してみてはいるが、そもそも「連想」や「アイデア」はどのような直観から生まれてくるのだろうか。例えば、前述の益地（2007）は、ギルフォードの「創造性の因子」を６項目引用して、こうした能力が発想に関わることを指摘している。

①問題に対する感受性……問題点を発見する力
②思考の流暢性……生成するアイデアの量
③思考の柔軟性……異なるアイデアを広範に生成する能力
④独創性……ユニークな答えを出す能力
⑤綿密生……具体的に工夫し完成させる能力
⑥再定義……異なる目的に利用できる能力

問題は、こうした「感性的思考」に関わる能力をどのように伸ばし支えるかである。

②や③は前句の読みに関わるように思うし、④は付句の発想、⑤は定型化の指導の中で考えていけるようにも考えている。さらに工夫をしてみたい。

ウ　座の文学としての連句

他の短詩型文学にないもう一つの連句の特性は、連句が協同制作を基本とする点にある。尾形仂は「芭蕉にとって座とは、その詩情を誘発し、増幅し、普遍化する、いわばかれの詩の成立定着にとっての不可欠の媒体であったといえる。」と指摘した[*11]。座に異質な他者が存在すると、その数だけ前句の解釈と付句の発想が生まれ、そのせめぎ合い・響き合いの中から一つの作品が成立していくのだ。

この連句創作における他者理解について、大岡信によれば、メキシコの詩人オクタビオパスは「西洋の諸々の信条に反する制作行為である連歌は、われわれにとっては一つの試練、小さな煉獄だった[*12]。」と感想を述べたというが、その意味は次の草間時彦の言葉で理解できる。

> 西洋の詩の場合は、詩を作るという作業が必ず個室の中で行われるわけですね。人の面前で詩を作るという作業は、詩人は少なくともやらない仕事だと思うんですよ[*13]。

この二人の言葉には連句の注目すべきもう一つの特質がはっきりと語られている。発想・習作段階を人前にさらす連句の創作は、他者の前に自分を開き、まだ形になりきらない自分のイメージに他者が参加することを認め合うことを前提として成立する創作行為なのだ。

「他者」がいるからこそ、感性が刺激され、発想が広がったり、創造性が高まったりする。それをどう支援していくかが鍵だろう。さらに言えば連句の「座」の創作エネルギーを、国語教室の、現代の子どもたちの中にどう形成していくか、ここに国語科教材としての連句の可能性と課題があるのだ。

【この授業を通して完成した他の連句作品例】

「受験生の一年」の巻

発句	梅雨明けの空に一筆飛行機雲	伊藤勇夫
脇	硝子の空気に心を洗う	赤鉤
第三	森の中とうめいな水ながれ来て	真っ平
四	かすかに響くひぐらしの声	中吉
五	木の枝にとまる小鳥が月ながめ	赤
六	夢見る少女長夜の星に	末吉
七	告白の予行演習繰り返し	中
八	叶わぬ恋に涙こぼれる	赤
九	恒例の独りですごすクリスマス	中
十	ガリガリガリと受験勉強	真
十一	アイス食べ満面の笑み花が咲き	末
挙句	新しい制服さあスタートだ	中

「　ロミオとジュリエット　」の巻

発句	梅雨明けの空に一筆飛行機雲	伊藤勇夫
脇	かさを閉じれば輝く太陽	露見男
第三	昼休み子どもがさわぐ声がして	花音
四	ああ秋休みなんでないのか	角果
五	お月見と祝いし友の誕生日	樹璃江戸
六	もみじ彩るお団子の上	花
七	窓越しになんで露見男は露見男なの	樹
八	来世も君の名は忘れない	露
九	雪降る日あなたのことを思い出す	樹
十	生クリームはカロリー高め	角
十一	届かない手を伸ばしてもあの花に	露
挙句	出会いと別れ桜の季節	花

「別れと出会い」の巻

発句	うるむほど紫陽花あをし朝の路	雅辺
脇	先ゆく声と傘のあざやか	月代 碧
第三	太陽の光笑顔にはじかせて	瑠衣
四	夕日眺めてなつかしむ過去	秋山馬七
五	夏祭り花火見るより君見たい	瑠
六	「はぐれぬように」私を引く手	碧
七	彼の背をながめて遠のく私の恋	駒李
八	十五夜ひとりだんごほおばる	馬七
九	かじかむ手 窓辺に並ぶ雪うさぎ	碧
十	思い出はみな川に流れて	馬
十一	咲きほこる私のハートが一目惚れ	駒
挙句	桜のように笑いかける彼	瑠

「流されて」の巻

発句	うるむほど紫陽花あをし朝の路	雅辺
脇	青空映す君の虹彩	浅葱
第三	ありし日の無垢な心よ今は無し	凪
四	歩きまわるや新宿の夜	木通
五	見上げてる行き交う人に盆の月	浅
六	落ち葉がうたう秋は肌寒	木
七	運命だ二人を結ぶあの指輪	凪
八	三月たたずに協議離婚へ	木
九	涙ふき木枯らしの吹く夜の街	浅
十	心を照らすツリーの光	凪
十一	花育て風のガーデン華やかに	木
挙句	私の心いつも春暁	浅

※生徒作品の作者名は生徒が考えた俳号である。
二巡目からは俳号の一字めだけ示している。

参考文献

*1「創造的な読み手を育てる連句の指導」1992（お茶の水女子大学附属中学校紀要第22集）、「創造的な読み手を育てる詩の指導 連句教材化の試み」1992（東京学芸大学国語教育学会研究紀要「文学の〈読み〉の指導３」）。

*2 「連句であそぼう！」1994（『講座音声言語の指導３話し合うことの指導』高橋俊三編著明治図書）。

*3 「対話と詩の創作連句で遊ぼう」1995（国語教育実践理論研究会「研究紀要」）。

*4 「グループウェアを活用した連句の授業」1995（『月刊国語教育研究』281日本国語教育学会）。

*5 暉岡康隆・宇咲冬男『連句のすすめ』（1991桐原書店）

*6 「国語科教材としての連句の有効性とその指導試案(2)」1997（お茶大附属中学校研究紀要第27集）。「連句で遊ぼう国語科教材としての連句の有効性とその指導試案」1997（『国語教育の理論と実践 両輪 第23号』両輪の会）

*7 『中学校学習指導要領解説・国語編』（平成29年6月）p. 11

*8 益地憲一『国語科指導と評価の探究』2002 渓水社）

*9 益地憲一「「感性的思考力」再考」（『巳野欣一先生喜寿記念国語科教育論集』所収、2007）

*10 青木幹勇「授業 俳句を読む、俳句を作る」1992太郎次郎社

*11 尾形仂「作品と座」『座の文学』1973

*12 大岡信「連詩の愉しみ』1991岩波新書

*13 徳田良仁監修・飯盛眞喜雄・浅野欣也編『俳句・連句療法』1990創元社　に所収の「座談会　俳諧における表現とコミュニケーション　その精神医学的可能性」における草間時彦氏の発言。